

随想 十二支と歌舞伎



後藤 知久

(会員・佐伯市中山区)

今年の干支は申(猿)。商人の家に生まれた私には向きの悪い干支である。父が何より嫌ったのは「猿」という言葉を口にする事だった。そのせいか、私の身体の中には未だにその思いが残っている。

ところでお正月と言えば、私達年配の者には、門松・日の丸・独楽回し・羽根つき・凧・かるた等が直ぐ目に浮かんでくるが、今はもうそんな面影は何処にも見られない。クリスマスをはじめ、外国のお祭りには直ぐ飛びつく若い者が、初詣は別として、あまりお正月を楽しもうとはしない。かく言う私も、毎年例になっていた体力テストを兼ねた尺間様の初詣登山を止め、もっぱらの寝正月を決め込んでいる。

そんな私だが、今でも正月が来るとやってみたいことの一つに「芝居見物」がある。初春狂言そのものにも引

かれるが、なんといってもあのロビーのお正月らしい華やかな雰囲気がいい。いき筋の人から商家の旦那。きりと締めた角帯。いかめしい軍人さんも今日ばかりは羽織袴の仕立て下ろし。ロビーに飾られた餅花。六代目の鏡獅子をあしらった大羽子板。届かぬ世界の一幅の絵と知りながら、何故かその雰囲気がたまらなく好きだった。

さて、前にも一度書いたような気がするが、歌舞伎にはいろんな動物が登場する。まず、今年の干支の「猿」の登場するものを見ると、これはそう多くはなく、私の知っている範囲では、『近頃河原の達引・堀川猿回しの段』と舞踊の『靱猿』があるくらいである。

試みに十二支を順に追っていくと、まず「鼠」はなんといっても『伽羅先代萩』の床下の場の鼠。次の「牛」はあまり舞台には登場しないが、『菅原伝授手習鑑』の車引の段などは牛は出ないが牛車と縁はある。

さて、次の「虎」になると、なんといったって真つ先に挙げられるのは『国性爺合戦』の虎退治。余談になるが、この芝居のクライマックス「紅流しの場」のアイディアは、黒沢監督の「椿三十郎」にも使われていた。そして誰にも受ける『傾城反魂香・吃又』にも登場する。

以上、二つの演し物がいずれも近松門左衛門であるのが面白い。

次の兎は劇に登場というのはないようだが、舞踊に「玉兎」というのがある。

十二支の中で唯一実在しない「龍」といえば、ご存じの『鳴神』がある。このお芝居は外国人にも分かりやすいとみえて、海外公演ではよく演じられているようである。

次の「巳」つまり蛇は、それ自身が主役というのは、やはり『京鹿子娘道成寺』の白拍子花子だろうか。舞踊家なら一度は踊ってみたいという、大変華麗なものである。主役ではないが、怪談物にはよく蛇が登場する。南北の『四谷怪談』などがそれである。

次は「馬」。馬は『塩原多助』などでは重要な役を占めているが、普通は武将の引き立て役や舞踊物の点景としてよく登場する。「馬の脚」という言葉があるが、一口に言うほどやさしいものではないらしい。

十二支のうち、全然芝居で見掛けないのは「羊」だろう。これは言うには及ばずというところか。

そして「猿」。次が私の生まれ年「酉」である。残念

ながら「鶏」がとなると、ちょっと思い出せない。

最後は「亥」つまり「猪」。猪と聞けばいやでも『仮名手本忠臣蔵』五段目山崎街道の猪を思い浮かべる。次の六段目の勘平の切腹に影響する役である。

というのが、私の知っている範囲だが、これが十二支以外となると、断然「狐」の登場が多い。有名な『義経千本桜』。市川猿之助の十八番の宙乗りも狐の化身であり、『本朝二十四孝』でも狐が活躍する。

こうして見てくると、お芝居に登場する動物は、「化ける」という業を持ったものが多いようである。歌舞伎そのものの持つ「怪しさ」を思えば当然のことかも知れない。

お正月と初芝居。それが実現できるのは東京・大阪・名古屋・京都に住む人ぐらい。地方では僅かにテレビで楽しむくらいである。私の場合は、これに「演劇界」という月刊雑誌が加わるので、情報だけは不自由しない。幸いこの号が発刊されるころ、お隣の延岡市に猿之助が来るので、早々と前売り券の手配を済ませ、楽しみにその日の来るのを待っている。「初芝居とはー、こりゃ春から縁起がいいわえ」という気持で……。